

# センター化による臨床・研究・教育の推進を図る 脳疾患に特化した地域の中核病院

## 新病棟の開設と センター化構想

100万人弱の人口を抱える明石市並びに神戸市西区では脳疾患、心臓疾患、がん、リハビリなど得意分野の異なる病院が連携し、地域の健康を支え



院長 大西英之

お返し、ひでゆき ●奈良県立医科大学卒業。医学博士。2000年12月に大西脳神経外科病院を開院。日本脳神経外科学会認定脳神経外科専門医、日本脳神経外科学会代議員、評議員、日本脳卒中学会評議員、日本脳腫瘍の外科学会評議員、日本頭蓋底外科学会理事など

ている。その中で、大西脳神経外科病院はT・P・A療法や血管内治療、頸動脈内膜剥離術などの脳卒中治療を24時間365日体制で行っている。臨床を中心としつつ、その豊富なデータに基づく臨床研究にも力を入れる点は同院の大きな特長となっている。カンファレンスが毎日開かれ、どのように手術するのかだけでなく、なぜそのようにするのか、エビデンスをもとに理論的に導き出される。臨床・研究・教育が有機的に結びついた環境で、質の高い医療を提供するとともに、志の高い若手医師を育成する。

2013年6月には新病棟が完成。病床数も82床から122床に増床された。脳腫瘍、脳卒中、脊椎脊髄疾患でフロアを分け、設備や人員を集中・特化させる「センター化」によって、治療と看護のさらなる習熟を図る。リハビリのためのフロアを設け、急性期のリハビリを院内で提供する体制や神経科学研究所を新設し、臨床研究を行える体制も整えている。

## 最新機器を導入し 術後の麻痺を抑える

新病棟の手術室は4室に拡張。さらに、血管造影と手術を同時に進められるハイブリッド手術室を導入し、これに隣接する形で、術中MRIを行える1.5TのMRIを備えた検査室を設置した。脳腫瘍手術において、術中に血管造影やMRIで血管や病変を確認することで、言語野や運動神経に近い部位に存在する腫瘍にもより広範囲で精度の高い切除が可能となった。術中電気刺激により神経の温存を確認しながら手術を進める。脳腫瘍と脳の区別が難しい症例では、悪性腫瘍細胞のみを赤く光らせる術中蛍光診断を導入。脳動脈クリッピング術では微細な血管を巻き込まないように術中ICGビデオ血管造影、手術ナビゲーションを活用する。術中に麻酔を解いて患者の反応を確かめながら手術する覚醒下手術な



〒674-0064 兵庫県明石市大久保町江井島1661-1  
TEL.078-938-1238 FAX.078-938-1236  
<http://www.onc.akashi.hyogo.jp/>



術中MRIが可能な1.5TのMRIを導入

ども行っている。大西院長は地域の救急体制の確立に尽力し、「地域連携パス」を用いて急性期病院・回復期維持期病院で治療計画を共有する仕組みを作り上げている。現在では、九州地方や沖縄県、さらには中国、ネパールなど、海外を含めた遠方からも患者が訪れる。大西院長は次のように話す。「脳疾患の死亡率を考えると、医療が担うべき役割はまだまだ沢山あります。当院は臨床・研究・教育が融合した、中枢神経系疾患を総合的に扱う医療機関としての発展を目指します」。構成／斉藤雅幸